シンポジウム記録 クロマグロ養殖業—技術開発と事業展開・展望—

N-10. 2) クロマグロ養殖事業の展開

—日本水産—

白須邦夫

日本水産養殖事業推進室大分海洋研究センター

IV-10. 2) Development of aquaculture industry of
bluefin tuna —Nippon Suisan—

KUNIO SHIRASU

*Oita Marine Biological Technology Center, Nippon Suisan
Kiasha, Ltd., Saiki, Oita 876-1204, Japan*

今後の日本水産株式会社のクロマグロ養殖を展開するに当たって、下記の3点が課題となるとおもわれる。その解決策を現在、研究開発している。

1. 持続的な養殖事業を継続させるために

(1) クロマグロ人工種苗の安定生産

クロマグロ養殖の将来をきめる第1の課題は、人工種苗の安定生産にかかっているというのは、過言ではない。現在のマグロ漁業の環境は、希少種の保護のためにマグロ漁業の存続が脅かされている。このことは、もちろん現在、天然のヨコワに頼っている蓄養養殖事業の存続にも関わっている。

現在、オーストラリアではミナミマグロの、地中海諸国でもクロマグロの種苗生産の研究が、急速に広まっている。

当社も2009年8月に和歌山県串本市大島にマグロの種苗生産設備を建設し、実験を開始した。安定的な種苗生産体制の構築にむけ、研究開発を継続していく。

(2) クロマグロ人工配合飼料の開発

持続的な養殖を安定させるもうひとつの決め手は、人工配合飼料の開発である。

周知の通り、クロマグロを1kg増肉するためには、

13-15 kgの生餌が必要となる。一方、世界の漁業生産量は、年々減少しており、日本も例外ではない。サバ、イワシ、イカ、オオナゴなどの生餌として使用される原料も漁獲高は年々減少している。この減少が続けば、生餌に回る原料が、食用として利用されるのは、中国へ輸出される秋刀魚の例を見ても明らかであり、将来的な供給が、懸念される。生餌の相場が高くなっても、マグロ製品に価格を添加することが、簡単に出来ないことは、現状のマグロ相場を見ても自明の理である。

そのために汎用性が高く、手に入れやすい魚粉、魚油を使った人工配合飼料の開発が急がれる。常温で保管が効き、解凍作業の必要なく、取り運びが便利になり、作業性向上によるコストダウンも期待できる。

早急に人工飼料の開発を行っていきいたいと考えている。

2. 生産量拡大のために

(1) 沖合い漁場の開発

現在、日本沿岸で、島嶼や半島に囲まれた波穏やかな漁場を確保することは大変難しくなっている。マグロ生産量を増加させるためには、波浪の激しい沖合漁場を開発することが、重要な課題となってきた。

当社は、まず沖合で生簀を沈下させたまま、給餌が出来るバージ型の給餌システムを農水省の競争的研究資金の補助を受け、東京大学、東京海洋大学の研究支援を受け、3年かけて開発した。

現在、ブリ生簀を対象に試運転をおこない、激しい海況での給餌の可能性や台風時の避港につき、実験が続けている。ブリ養殖で可能となれば、マグロにこれを拡大し、マグロの沖合養殖システムを開発していきたいと考える。

以上の3つの課題解決を中心にクロマグロの事業展開をしていきたいと考えている。